

1970 年代日本における翻訳と Translation Studies

Translation and Translation Studies in 1970's Japan

佐藤＝ロスベアグ・ナナ

Nana Sato-Rossberg

(SOAS, University of London)¹

1970 年代、日本は転換期にあった。1973(昭和 48)年に始まった第一次石油危機により、日本は不況におちいり、1974(昭和 49)年には戦後初のマイナス成長に転じる。この状態は 1976(昭和 51)年まで続いた。坂野潤治他によればこのような危機に「対する日本資本主義の対応が、国内では日本型企业社会を確立し」と言う(1994 p. 392-3)。日本はすでに「76 年ごろから世界的不況から抜け出し始めたが、その推進力は、第一に輸出の飛躍的拡大であった」(歴史科学協議会 2000 p. 449-450)。1970 年代の終わりには第二次石油危機がやってくるのであるが、日本は 1980 年代のいわゆるバブル景気に向かって経済発展をとげる。1970 年代は政界でも保守政党を揺るがす事件として、内閣総理大臣を務めた田中角栄が、1976(昭和 51)年にロッキード事件で逮捕されているし、沖縄が日本に返還されたのは 1972(昭和 47)年であった。実は、日本の転換期であった 1970 年代は、学問的にも非常に実りある時代であったことが指摘され(たとえば吉見俊哉・テッサ・モーリス＝鈴木の『天皇とアメリカ』)、関心が集まりつつある。そして、翻訳にかかわる議論も例外ではなかったことが、明らかになってきている(佐藤＝ロスベアグ 2014 年)。

1970 年代、学問としての翻訳への関心が日本において高まろうとしていた形跡があるのだ。ユージン・ナイダの *Toward a Science of Translating* (1964) の日本語訳である『翻訳学序説』(開文社)の成瀬武史訳による刊行が 1972(昭和 47)年、また 1973(昭和 48)年にはノア・ブラネンとナイダの共著である『翻訳—理論と実際』(研究社)が刊行されていた²。

特に注目したいのは、1973(昭和 48)年に刊行された雑誌『季刊翻訳』(75 年) みき書房)である。この雑誌は、これまで言及されることはあっても、その革新性について、ほとんど取り上げられることがなかった雑誌である。しかし、『季刊翻訳』は、まさに翻訳論と実践をつなぎ、翻訳の概念を幅広くとらえ、論じていこうとする研究誌であり、日本において翻訳を「科学」として学問しようとする Translation Studies(以下 TS)の萌芽であったととらえることができる。それは、西欧で TS がゆるやかに始動する 1970 年代の動きに共振し、呼応するかのよう、学問として展開し、共に発展する可能性を含んでいた(佐藤＝ロスベアグ 2014)。『季刊翻訳』では、多様なジャンルの実践翻訳家、言語学者から人類学者、そして思想家までが翻訳に関するさまざまな議論を行っていた。『季刊翻訳』では翻訳論を否定する者もいたが、雑誌の意図は、今の言葉で言うならば、翻訳を学際的な学として構築することであったと理解できる。もし、このような仮説が正しいとすれば、TS が 21 世紀に日本に遅れて入ってきたと言説が果たして射的を射ているのかという疑問がでてくるし、なぜ 1970 年代に芽生えた TS が日本で育たなかったのかという問いも生まれる。仮説を信じ

るのであれば、この歴史から学ばない限り、同じことが繰り返され、結果的に学問としての翻訳が日本に根付かない危険もある。

本特集においては、このような 1970 年代の翻訳への学問的関心を念頭に、各執筆者がさまざまな題材を用いて、当時の翻訳について論じていく。もちろんすべての領域をカバーすることはできないが、本特集の目的は、当時刊行されていた雑誌『英語青年』(研究社)、『季刊翻訳』(日本翻訳研究会)、『翻訳の世界』(大学翻訳センター、日本翻訳家養成センター)から翻訳に関する言説を概観し、1970 年代に刊行されたいくつかの翻訳作品の分析を通じて、1970 年代の日本で学問としての翻訳への関心がどのように芽生え、いかなる方向へ流れていったのかを検証することにある。

これまで特に明治期に関する翻訳研究は数多く行われてきた。しかし、日本における TS の歴史を考える際には、TS という学問そのものが新しいこともあり、1970 年代以降の翻訳言説や翻訳を取り囲んでいた社会を中心に研究する必要がある。しかし、時代的に新しすぎるがゆえに、村上春樹のような著名な作家兼翻訳家に関する研究は例外として、まだそのような研究はなされてこなかった。

西欧起源の TS が日本でどのように受容され、ローカライズされたのか、されなかったのか、いかに既存の翻訳研究と混ざり、または混ざらなかったのかという翻訳研究史を考察することは、今後の TS の展開を考えても学問的意義を持つであろう。限定的とはいえ、本特集における研究群は日本における TS の理解や今後の発展に貢献するだけでなく、西洋を中心に展開している TS の議論に、日本における翻訳研究や TS 的な思想という新しい観点を投じ、TS を豊かにする可能性を持つ。

今回の特集は出発点であり、企画者は今後も本プロジェクトをさらに展開していく予定である。本号を読まれ関心を持たれた方々が、さらに新たなメンバーとして参加してくれることを期待したい。

なお本特集においては、日本の年号である明治、大正、昭和を西暦と併せてもちいている。

【註】

1 本特集を編むに当たり、The Japan Research Centre (SOAS, University of London)から助成を受け、国際日本文化研究センター(京都)に滞在させていただきました。

また『翻訳研究への招待』編集者である田辺希久子氏にも大変お世話になりました。

それぞれの機関とみなさまに感謝してここに記します。

2 ナイダとブラネンは共に聖書協会翻訳委員会のメンバーであった。アメリカにあるナイダ研究所が主宰する翻訳サマースクールであるナイダスクールが活発に活動を行っており、ナイダは Translation Studies 史には必ずと言っていいほど登場する。関心のある方は以下を参照いただきたい。

<http://www.nidainstitute.org/>、<http://nsts.fusp.it/about-nsts>

【参考文献】

『英語青年』(1898-) 研究社

『季刊翻訳』(1973-1975) みき書房

『月刊翻訳の世界』(1976-1977) 大学翻訳センター

『翻訳の世界』(1977-2005) 日本翻訳家養成センター

坂野潤治他編(1994)『シリーズ日本近現代史 4 戦後改革と現代社会の形成』岩波書店

佐藤=ロスベアグ・ナナ(2014)「共振と呼応-1970年代日本における Translation Studies の芽生え」

月刊『みすず』11月号:6-13

歴史科学協議会編(2000)『日本現代史 体制変革のダイナミズム』青木書店

ユージン・ナイダ(1972)『翻訳学序説』(成瀬武史訳) 開文社

ユージン・ナイダ、ブラネン・ノア(1973)『翻訳—理論と実際』(沢登春仁、升川潔訳) 研究社

吉見俊哉・テッサ・モーリス=鈴木(2010)『天皇とアメリカ』集英社新書

